

59 泉屋家文書の外科資料蘭文断簡、外科問考について

相川忠臣・ハルメン¹⁾ ボイクルス・

中西³⁾ 啓

最近長崎の旧家泉屋家からシーボルト記念館に寄贈された泉屋家文書はオランダ通詞の名門本木家旧蔵の文書や本木良永・正永の素稿等を含む貴重な資料である。記念館よりその内の外科資料断簡の調査を依頼された。泉屋家文書の和十四、外科問考は本木庄左衛門（正栄）（一七六七—一八二二）によって原書から書き写された蘭文とその和訳文からなる草稿である。正栄の筆とされる諸厄利亜国語和解、諸厄利亜語林大成や拂郎察辭範の草稿と比較して和十四の蘭文は運筆の特徴がよく一致する。

この外科問考は Bernardus de Bont 著 タイトル「Nieuwe examen der chirurgie na de hedendaagse practijk」『現代の実地医家のための新外科問考』を書き写して翻訳したものである。Bernardus de Bont はオラ

ランダのデルフト出身の外科医であった。原本は外科ギルドに入るための初心者を対象とした試験対策のための本で当時大変人気があった。初版は一六九四年、アムステルダムでの発行である。第六版（一七四〇年、ライデン）と照合して、和十四の十の断簡の順序がわかった。和十四の蘭文は第六版とは少し違いがあるので第六版以前の版からの引用と思われる。原本は全八巻からなり、巻三は「Van de chirurgie」外科について」という題名である。その第一章と第二章とが和十四の十の断簡と一致する。断簡一の最初には巻三の序文が「外科問考第三之書著す處は惣て外科の所業、諸の小事の所為を分ち初心の学士をして悟す事を要とす」と訳されている。それに続く第一章の題「I. Capittel. Bepaling der Heelkonst en haar deelen」第一章、外科とその分野の定義」が脱落している、直接第一の問い「弟子、師に問て曰く外科は如何なるものや」に入っている。これに「師、弟子に答て曰く、病者に悪き形容の有れば相應の小事、道具と薬味とを以て力らを竭し癒す處の一術也」と答えて問答形式で進行する。師が質問し、弟子が答える原本を逆転させ

て弟子が質問し師が答えるように変更している。第二章の題は II. Capitte van d'instrumenten 「第二章、道具について」である。訳者は外科手術器具についてはかなり知識があり、的確な表現で訳している。

もう一つの外科資料蘭文断簡・蘭十一は有名な Laur-ens Heister の Heelkonstige onderwijzingen met aamerkingen van Hendrik Ulhoorn. Deel I. 2e druk Amsterdam, 1755 を書き写したものである。和二十八はその和訳文である。

本木家の外科学教育では入門書としてデュポンの外科問考を学び、本格的な外科書としてハイステルの書を学んでいたであろう。大槻玄沢は天明五年（一七八五年）から同六年にかけて四ヶ月間長崎に遊学した。本木良永宅に寄宿してハイステルの外科書の訳読を良永や吉雄耕牛に学んだ。若い正栄は玄沢と競ってハイステルの外科書を会読し翻訳していたのではなからうか。後年玄沢はハイステルの外科書の各章を翻訳し出版した。

これらの外科資料蘭文断簡は本木良永、正栄親子が西洋外科学の入門書として外科問考を、本格的な外科書と

してハイステルの書を用いて学ばせ、西洋外科学導入に大きな役割を果たしていた事を示唆している。

（長崎¹⁾大学医学部、ライデン²⁾大学医学部、

長崎³⁾市）